

法律 とは何か

弘前市立南中学校

相馬 一護

「王て、吹き飛んでしまえ」

少年は吐き捨てるように言った。突然の犯行予告。誰もかデマだと思っていたが、その後、本当に起きてしまった新宿駅爆破事件。容疑者は渡辺篤人。たった十五歳の少年の犯行は、世間を震撼させた。

近年注目されている「少年法」や「少年犯罪」は、十五歳の僕たちも考えるべき問題であると思う。

僕はこの本と、「法律」という言葉を通して出会った。僕の将来の夢は弁護士になることだ。だから、夢に近づくために法律の本を読もうと思ったことが出会いのきっかけだ。数多くある法律の本からこの本を選んだのは、「少年法」という言葉に惹かれたからだ。十五歳の僕にも適応されることから、僕にとって最も身近な法律だといえる。

この本の筆者は、「少年犯罪」や「復讐の連鎖」といった、扱いにくい問題についてもしっかりと描いている。特に加害者遺族の被害者性、世論の加害者性。また、被害者遺族の加

害者性について、すごく丁寧に描かれていると感じた。少年犯罪を犯した少年たちの家族の末路が生々しく、痛々しい。だが、そんなところも「少年犯罪」や「少年法」を考える僕にとつて大切な表現なんだと思えた。

ある日、記者の安藤は恋人の命を奪った少年、灰谷ユズルが社会復帰しているのを目撃し、怒りのあまり少年のその後を記事にした。このような行為は現実世界でも起こっていると思う。なぜなら、僕を含め世論は、加害者のその後や事件の詳細を知りたがっているからだ。その背景には「少年法」が関係している。どんなに凶悪な事件を起こしても、「少年法」に守られている少年たちは、ニュースや新聞で「少年A」と報道されるからだ。そして、その事実がさらに世論を突き動かす。

僕にはこの本で好きな場面がある。それは、渡辺篤人がもたらした影響で、少年法改正のデモが起こった場面だ。このことを踏まえてもう一度タイトルを見てみると、僕は鳥

肌が止まらなかった。タイトルの『15歳のテロリスト』は、「テロを犯し、犯罪者となった少年」という意味合いの反面、「社会に影響をもたらすし、法律にテロを起こした少年」という意味合いにも僕は取れると思った。

僕は初めて、メディアワークスさんと松村涼哉さんの作品を読んだが、筆者の松村さんはすごく冷静な方だと文章の隅々から感じた。だが、決して冷酷ではなく、ところどころに温かく、寄りそってくれるような表現もあった。僕はまた、メディアワークスさんや松村さんの本を読みたいと思った。

僕は『15歳のテロリスト』を読み終えたあと、この本のテーマは、「少年法」「少年犯罪」の他に、「メディア」の三つであると感じた。メディアの一つの報道が事件の解決に役立つ反面、灰谷ユズルのように事件を悪化させるきっかけにもなる。このことから、メディアの加害者は、犯罪と切っても切れないような関係だと思う。そして、その関係が物語の鍵となっている。

この物語には終始「スノードロップ」という花が登場している。僕は気になり、その花について調べた。それでも僕は鳥肌が止まらなかった。なぜなら、スノードロップの花言葉が「希望」と「切ない恋愛」だったからだ。「希望」は渡辺篤人の今後を、そして、「切ない恋愛」は灰谷アズサの恋心

を表していて、両者の思いを一つの花で表現している。そして最後のワンシーンでは、二人の座っているベンチの前にスノードロップが咲き誇っていて、スノードロップは二人の関係を象徴する花であると感じた。

最後に、犯罪や事件には多くの人が関わっていると僕は思っている。被害者や加害者、遺族、世論、マスコミ、メディアなどたくさんの方の声や意見がある。それぞれみんな意見も違えば目線も違う。渡辺篤人が何度も主張していたように、目線や意見に寄るのではなく、真実を知ることだ。

「犯罪を犯した人は裁きを受け、罪を償わなければいけない。」

この声は正しい。

「少年法は甘い。もっと厳しくするべきだ。」

この声もきつと正しい。だがその前に、どうして犯罪が起きたのか、「誰が本当の悪人か」を知らなければいけない。それを知らなければ加害者を罰することもできない。そして、被害者や遺族も納得しない。被害者に報いることもできない。既存の「少年法」や「少年犯罪」に対しての感じ方や見方、考え方がガラリと変わる作品だと僕は思った。

これからは、何事にも深くさぐって真相や真実を知り、正しい行動や発言をしようと思った。